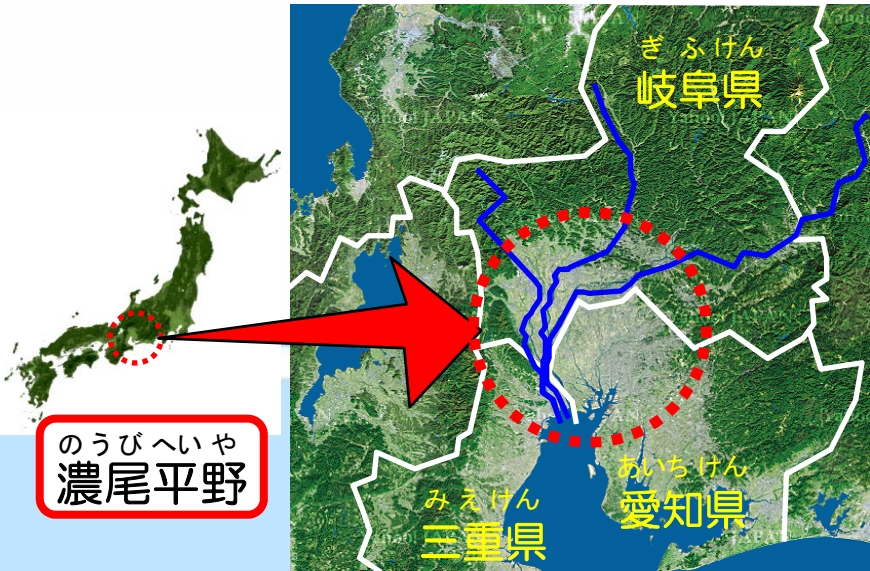


木曾三川の水がはぐくむ濃尾平野の紹介

日本にっぽんのほぼまん中に広がる濃尾平野なかひろのうびへいや、そこを流れる木曾川ながきそがわ、長良川ながらがわ、揖斐川いびがわを「木曾三川」と呼びます。

濃尾平野のうびへいやは木曾三川きそさんせんみずの水の流れによってはぐくまれ、現在げんざいのように安心あんしんして農業のうぎやうが行えるおこなような環境かんきやうは、多くのおほく人々ひとびとの苦勞くろうと、農業水利施設のうぎやうすいりしせつの整備せいびによってもたらされました。



濃尾平野

木曾三川が濃尾平野をはぐくんだ（造った）

おおむかしの濃尾平野は海でした。長い年月をかけて、木曾三川の上流に降った雨が川となって山の土や砂を運び、少しずつ陸地が造られました。こうして、現在のような濃尾平野ができました。



さなげじんじや こず
猿投神社の古図

なが ねんげつ
長い年月を
うみ
かけて、海
りくち か
が陸地に変
わっていき
ました



制作・著作 玉川学園 多賀譲治

うみ
海のほとん
どが陸地に
かわり、濃
びへい
尾平野がで
きあがりま
した



制作・著作 玉川学園 多賀譲治

濃尾平野は、養分を多く含んだ土で、農業をするのに適していました。

しかし、3つの川が集って、少ない雨でも水があふれて洪水をおこし、そこで農業をしていた人々は、いつも洪水におびえながら生活していました。

あみ め かわ さんぼん かわ
網の目のような川を、三本の川に！！

濃尾平野の低平地では、土地が低く、木曾三川が集まっていて洪水がおこりやすい地域でした。そのため、そこで暮らす人々は洪水から身を守るため、家と田んぼの周りを堤防で囲んだ「輪中」を作っていました。

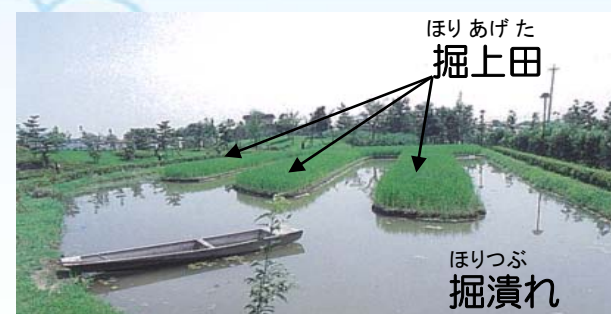
輪中では土地が低く、水はけも悪い状態で、普通の田んぼでは稲も育たないため「堀田」という独特な方法で農業をしていました。

しかし、輪中の堤防は壊れやすく、洪水がおこればすべてが流され、人々は苦しんでいました。

そのため、明治20年から25年の歳月をかけ、木曾三川を完全に分流する大改修工事が行われ、やっと洪水の少ない地域になりました。



げんざい わじゅう
現在の輪中



わじゅう た
輪中の田んぼ
ほりた つち ほり あ
堀田はまわりの土を掘り上げて
ほりあげた ほ
できた掘上田と、掘られてできた
ほりつぶ
掘潰れからできています。
(写真提供：海津市歴史民俗資料館)



ながらがわ いびがわ
長良川 揖斐川
ていぼう ぶんりゅう ながらがわ いびがわ
堤防で分流された長良川と揖斐川

き そ さん せん しゅ すい く の う

木曾三川から取水する苦悩

濃尾平野の北東部で少し高台となっている地域では、川の水を利用することに苦心していました。米作りのために川から水を引くのですが、水を取り入れることを「取水」といい、用水路などに取り入れる場所を「取水口」と呼びます。

広い濃尾平野を潤す農業用水を取水するため、取水口や長い用水路などの施設が造られました。むかしは機械やコンクリートなどもなく、大変な手間とお金がかかり、施設を保つことも大変なことでした。



きそがわ しゅすいこうしゅうふうくこうじふうけい こっつようすい
木曾川の取水口修復工事風景（木津用水）



えどじだい きそがわ しゅすいこう いちず ねん
江戸時代の木曾川からの取水口位置図（1727年）

木曾川通繪圖

現在の犬山頭首工

犬山城

享保12年(1727)「木曾川通繪圖」(原図は蓬左文庫所蔵)。下部に木曾川からの取水口が3ヶ所描かれている。左から宮田杖、般若杖、木津杖。(出典:旧編「富田用水史・附図」)